

「今も残る旧村の風情」

増山雄三

真珠業を営んでいた、白系ロシアの両親を
持った和田君とは、小学校三年生から大学も
同期だったので、当時、神戸東灘の本山にあ
った彼の家へ、よく遊びにいったが、先日、
八十四才の高齢で亡くなったので、コロナ禍
ながら、懐かしの彼の家へ弔問に訪れた。

この「本山」という名称は、明治になって
から、この地域にあった二つの荘園から一字
ずつをとり、本山村ができたのをルーツにし
たものだが、当時は、人口が四千人ほどの小
さな町だったが、今は六万人を超える大きな
町になっていて、近くには、JR摂津本山駅
や阪急岡本駅がある。

地域は東西に長く、標高一八五米の山側奥
深くの参道越しには、古くから沖を航海する
船の目印にされてきた、「灘の一つ火」で有

名な保久良神社、大谷光瑞の二樂莊跡、ドイツ商人ヘルマンの屋敷跡等の名所を擁し、山側には旧村ごとの鎮守や岡本梅林が配され、東西に走る阪急やJRに国道二号線の沿線沿道に、市街が発達した。	ここに住んだ谷崎潤一郎は、「猫と庄造と二人のをんな」を書いたが、そこで「一直線に続いている国道の向こうに、晩秋の太陽が沈みかけていて西日が殆ど路面と平行に射している中を、人だの車だのがみな赤い色を浴びて、長い影を曳きながら通る」と描く。	高層の建物が増えた今でも、夕暮れ時には本山の街路を西へ歩む人は、遥か向こうの地平線や建物の上に沈みゆく、太陽から放たれる横流れの西日を受け、人や車が紅い色を帯び、長い影を曳く光景を目のあたりにする。	そして、公設市場を過ぎ、昭和七年（一九三二年）に建立された、国道地藏尊が立っている小路のバス停留所の向こうには、阪急沿線の山々が、澄みきった空気の底に、くつき
---	--	---	---

りと襷を重ねていたのが、もう黄昏の蒼い薄靄に包まれていくのを肌で感じ、山々に抱かれた市街の上に、いつしかしっとりとした夜がやってくるのも、昔から変わらない本山風情なのだろう。

そして、昭和十三年（一九三八年）に受けた大水害の惨状は、谷崎潤一郎の「細雪」に詳しいが、昭和二十年（一九四五年）の空襲と、その五十年後の阪神・淡路大震災では、森南町や本山中町を中心に、深刻な被害を受けて、地域に癒しがたい傷を残した。

それで、かつて十以上あった市場も、震災の前後にほぼ消滅したが、しかし、起伏の多い岡本駅周辺と、東西に開けた摂津本山駅をつなぎ、幾重にも交差するパサージュからなる岡本商店街は、個性的な店が多くあり、甲南大学等の所在も相まって、若者が集散する魅力的な街に成長した。

さらに、震災で倒壊した国道地蔵尊は、地元住民の手で再建され、甲南本通商店街も健

在であり、かつて工場が多かった国道以南には、マンション群が林立し、また、各所には公園が点在し、子供達の声が絶えない現在の本山は、神戸市内で数少ない、人口増加の街であり続けている。

令和三年十二月